

立身出世と明治期青年のセクシュアリティ

渋谷 知美（東京大学大学院比較教育社会学D2）

はじめに：セクシュアリティ研究としての青年研究、青年研究としてのセクシュアリティ研究

本論は、1880年代から1900年代初頭の雑誌記事に見られる明治期の書生・学生の性生活のあり方と立身出世の相克を素材として、この時期日本男性のセクシュアリティがどのようにして水路づけられていったかを探るものである。本論は、二つの点で教育の歴史社会学にとって馴染みが無いテーマだと思われる。第一に、青年のセクシュアリティを扱うということにおいて、研究テーマとしての「青年」は、「立身出世研究」やアリエスのインパクト以降の教育の歴史社会学において馴染み深いものだが、いずれの研究も忌避するかのようにならぬ青年の〈性〉〈セクシュアリティ〉を論ずることをしていない。学生生活の一面として傍流的に扱うことはあっても、中心テーマとして論じているわけではなく、なにより、既存の研究は明治期の青年の性的活動を青年期につきものの一側面として無条件に論じているのであり、歴史研究としては禁じ手であるはずの「現代の常識持ち込み」が行われてしまっている。「自然」「当然」「本能」そして「生物学的事実」までも議論の俎上に上げてその歴史的構築過程をさぐり、出自を暴き出す新歴史主義以降の視点としては、甚だ不十分と言わねばならない。当研究は、フォーコー『性の歴史』を端緒として興ったセクシュアリティ研究の視点にもとづき、〈性〉〈セクシュアリティ〉を万人普遍に備わった「本能」と見做すことをしない。そうではなく、ある時代の一時点から、造りあげられ、選り取られた文化現象として取り扱う。

教育社会学への馴染みの無さの第二点として、女性ではなく男性のセクシュアリティを扱うということがある。理由は省くが、当のセクシュアリティ研究においても男性のそれを扱うことはまだ始まったばかりというのが実状である。従来の男性中心的な学術制度の下では、確かに学問は男性を研究対象に据えてきたと言いうる。しかし、そこで流通している男性とは、人間 Man を不当に僭称する「普遍的存在」としての男性である。われわれは、人間＝男性というエピステーメから脱け出し、〈女性〉という特殊項に逆照射されて浮かび上がる、一方の特殊な項としての〈男性〉をこそ問題にしなければならない。

対象：なぜこの時代なのか

1880年～1900年初頭を選んだのは、明治初期の1880年代という時代が、いわゆる近代売春の出発点と考えられるからである。買春だけが男性の性でないのは当然だが、そこに端的に青年の性のあり方が表出していることは確かである。江戸・吉原的な花街と近代的な娯楽施設の象徴である凌雲閣が同居していた当時の浅草が象徴的に示すように、1880年代は、江戸の残滓と台頭しつつある近代・東京が拮抗していた。この時代に焦点を合わせることは「近代の捏造物」と呼ばれる〈セクシュアリティ〉の端緒を掴むことになる。

本題：立身出世と性が両立した時代

内閣発足後間もない明治初期の政治家たちは、正妻にも妾にも芸妓を迎えていることが多かった。ざっと挙げられるだけでも、伊藤博文、中井弘、井上馨、大隅重信、山本権兵衛らが芸妓を妻にし、西園寺公望が有名な新橋芸者を妾に持っていた。このような政界トップの婚姻事情は当時の書生たちにも知られており、坪内逍遙の『当世書生気質』には、町人はともかく政治家や学者などが芸妓を妻に迎えるのは嘲笑の対象になる、という一節がある（岩波文庫、227頁）。このように芸妓を妻として迎えることを「恥」とする価値観があったことは確かであったが、しかしこれだけ多くの政治家が芸妓を正妻として迎えているところを見ると、ここは素直に芸妓という身分が政治家の妻としてむしろ相応しかつたと考えたほうが自然である。当時の遊郭にも遊女を崇めたてる「色道」の価値観は残存しており、格下はともかく上流の芸妓は良家の子女などより「選ばれた女」であったと考えられるからだ。勿論芸妓の身抜け金のことなども考え合わせれば、それが出来る学士など殆ど居なかった。芸妓を妻に迎えることは、職業上の立身出世と同様、達成困難な「夢」としてあった。

男の性の問題化：『品行論』パラダイムの1880年代

学生の性的放埒を戒める目的があったとされる『書生気質』が著されたのと同じ1885年、福沢諭吉は「品行論」と題される小文を『時事新報』に連載する。その趣旨は、最近の国際化に鑑みると日本男子の品行に

は憂慮すべき点が多いので、私福沢が筆でもってそれを是正する、というものだった（『品行論緒言』『福沢全集』巻5、1898年）。男子の蓄妾や登楼を卑しむべき陋習として批判したこの連載の影響力が殆ど無かったことは、その後の実態を見れば明らかである。しかし、後に品行論は一つの言説ジャンルを形づくることになる。そのことを考え併せれば、この連載は「妾を蓄ふ」「娼妓を召す」という言葉によって周囲に溶け込んで認識不可能だった事柄を切り取り、概念として析出する役割を果たした。男子の性的活動が問うに値する問題として定式化したのである。

しかしここではあくまで、日本男子の性品行が文明開化にそぐわない、外国に恥ずべき旧習だから糾弾されたということ強調しておきたい。1868年から1900年にかけて各地で、盆踊り、立ち小便、男女混浴、女相撲などが禁止されたが、男子の蓄妾・登楼もその中の一つとして排斥されたのに過ぎない。そこにはのちに登場するような衛生的な配慮や、男女同権の視点は無い。その意味では、男子の性にとってその行動が問題としてフレームアップされたことは偶発的事象だったといえる。

立身出世と性的放埒の非両立：『遊学案内』パラダイムの1880年代末～1890年代

『品行論』『書生氣質』によって定式化された学生の性品行問題は、「遊学案内」の類や「学生の墮落」を嘆く言説によって深化される。ここでは前者についてのみ述べるが、地方の上京志望者に入学指南を施し下宿や寄宿舎の実態を知らせる遊学案内は、同時に「東京」という場所を性的放縦をさそい学生を「墮落」へとおとしこむ「魔都」として描きだした。前の『品行論』が、対外的な体裁を視野に入れて、蓄妾や登楼を前近代的な卑しむべき陋習の一つとして排斥したのに対し、「遊学案内」では、性品行に関わる事柄は個人の立身出世を阻むものとして描きだされている。上京志望者が増えもはや「僥倖」は望むべくもない「秩序正しくなりつる社会」（『遊学の葉』『少年園』1888年）では、立身出世の障害となりうる要素はできるだけ排除してゆかねばならない。学生や書生に多大な影響力を与えた徳富蘇峰は、立身出世と恋愛の両立不可能性をはっきり断言した（『非恋愛』『国民之友』125号、1891年）。

確たる「科学的」根拠：医学的パラダイムの1900年代

1900年代に入ると、立身出世と性的活動の非両立

の「イメージ」は、近代医学によってはっきりした「根拠」を与えられる。その変化は、1891年から毎年発行された『東京遊学案内』を見ても分かる通りで、1891年版では性的放縦を戒めるのはもっぱら「品行上の注意」の項目だったが、1902年版になると「交際の注意」と「衛生上の注意」の項が同じ役目を果たすようになる。後者の項には1889年度統計として病因別の死亡者数が掲げられており、「花柳病」のカテゴリーも見られた。

ところでなぜ、学生の性的放埒がひとり品行の問題や立身出世の問題にとどまらず、医学的言説の対象となったのだろうか。そこには、「花柳病」が「亡国病」として危機感をもって認識されたという背景がある。花柳病の流行じたいはそれ以前からあったし、「梅毒に罹ってこそ一人前」と言われることさえあった。しかし、性病の統制を怠ったため、日本の徴兵制は多くの除役者を出すことになった。「亡国病」と言われるゆえである。このような背景のもと、医学言説が説得力を持ちはじめたのであった。じつじつ1906年には、第一高等学校の体格試験にて17名中13名が花柳病ではねられたことが明らかにされている（井上哲次郎『学生風紀問題に就て』『太陽』12号13巻）。色恋沙汰が立身出世を阻むことは近代科学の実証のもとで決定的となった。また、花柳病が亡国病のレッテルを貼られたことは、必然的に芸娼妓の地位の低下をもたらした。政界トップが芸妓を妻に迎えることなど考えられることではなくなった。

暫定的なまとめ

立身出世と男子の性的享楽の享受はそもそもの始めから対立物としてあったわけではなかった。それを両立不能としたのは、参入者の増加による競争の激化であり、性病を警戒する医学的言説であった。ここで我々が気づくのは、〈品行論〉→〈遊学案内〉→〈医学〉の各パラダイムを通して、常に立身出世と性が裏表に語られていることである。福沢の『品行論』は個人の立身出世を言いはしなかったが、対外的な体裁を考慮に入れた論調は「国際社会における日本国の立身出世」を請い願うものではなかったか。立身出世と性がなぜ対置されるのかを存在論的に問うたり、その根源を求めることはおそらく徒勞に終わる。ここでは、このような言説的事象があったこと、そしてその相剋のあいだに男性のセクシュアリティが水路づけられていったことを確認するにとどめたい。